

栗山雄佑著 『〈怒り〉の文学化——近現代日本文学から〈沖縄〉を考える』

テクスト

後山剛毅

着陸態勢にはいるKC-135空中給油機に向けられた〈怒り〉かのように、本書の書影は赤々と燃えている。〈怒り〉の炎を高解像度に読み解く本書の試みのように、その赤は微妙なグラデーションを帯びている。ひとりの男がフェンスの向こう側を覗いている。そこは、フェンスのこちら側よりも濃い赤で表現された不可視の領域である。KC-135はまさにその地帯に降り立とうとしている。男はその不可視の領域を凝視し続けている。

本書は、著者である栗山雄佑が二〇二一年に立命館大学文学研究科に提出した博士論文「近現代「沖縄」文学研究——ジエンダー・暴力批判・戦争記憶継承」に加筆・修正が加えられ、序章と終章を含む四章分の書き下ろしが追加されたものである。終章において著者が言及しているように、本書のもとになった博士論文が提出されたのは、二〇二〇年という戦後七十五年、九五年九月の少女暴行事件から二十五年という年であった。新型コロナウイルスのパンデミックのまえに、「世界は恐怖」し、「沖縄

のみならず〈戦後〉七五年、事件から二五年という節目が後景化した感は否めない^①状況だった。広島・長崎の平和記念式典は縮小され、それは沖縄の「慰靈の日」においても同様であった。現実の世界を包む「恐怖」によって、過去に失われた〈声〉やいままさに失われつつある〈声〉に向き合うことが困難となつた空気のなかで、本書に収められた〈声〉の多くが拾われた。著者は、フェンスの向こう側の不可視な空間から残滓として聴こえてくる〈声〉を拾い集め、これらの〈声〉を通じて十年後の世界への祈りを提示しようとした。

著者は、一九九五年が戦後五十周年の節目であり、阪神・淡路大震災やオウム真理教がサリンを散布したテロルが発生した年として認識——集合的に記憶されていることを述べつつ、沖縄では別の出来事の記憶が想起される年であると述べる。それはさしすめオムニバス映画のような構成だ。それぞれの作品をさまざま形で表する／あるいは抑圧された〈声〉がつらぬいてはいるが、それぞれの章の内容は、章単体でも強度を持った主題を提示

している。それらが〈声〉というテーマに収斂されているのが本書の特徴だ。九・一一同時多発テロをテーマに、十一人の映画監督がそれぞれ十一分九秒〇一の長さで撮影したオムニバス映画のなかで、一九七三年九月一一日のチリ・クーデターをひとりケン・ローチが想起したように、著者は一九九五年という集合的記憶に抗つて個々の〈声〉を拾おうとしている。

本書の目的を著者は、「性暴力の記憶が沖縄県内外でいかなる〈怒り〉を生み出したのか、それが各作家の文学的想像力によつていかに受容され、文学テクストとして発表され、読者にいかなる変容を与えたのか、を明らかに」することを説明する。それは、一九九五年の米軍による少女暴行事件をめぐつて想起される戦時性暴力の記憶と対峙することでもある。その際に著者はある〈声〉に耳を傾けながらも、それが実際に現在の沖縄に存在する〈声〉を収集することではないことを明確に主張している。^③著者は、今ある沖縄の〈声〉を掬いあげるためにこそ、過去から到来する〈声〉に耳を傾ける。著者が注目するのは、沖縄の〈怒り〉を想起可能なものとしてアーカイブのなかに「仮固定」することではない。それは文学作品のなかにすでに書き込まれた〈怒り〉の〈声〉と対峙することである。

「ジョージを射殺した猪」論では、フエンスの向こう側への想像力が喚起される。「平和通りと名付けられた街を歩いて」論では、天皇制批判によつて、天皇制を批判することが抑圧されるという困難が、著者による解析を通じて可視的な領域へと浮上してくる。これらと作品はどれも、フエンスのこちら側にとつてのあちら側の領域を眼差すものであり、著者は、こちらとあちらを区別してそのどちらかに与する読み方によつて却つて、作品のなかに埋もれている〈声〉を見失つてしまつことを明確に描き出している。

第二部では、目取真俊の作品読解を通じて、一九九五年九月以降の沖縄における性暴力とそれに対する対抗暴力の諸相を捉える試みがおこなわれる。第二部で扱われる作品は、目取真の希望、「虹の鳥」、「水滴」であり、「水滴」の議論のなかで戦時・戦後そして現代におけるさまざまな暴力の様相を〈記憶〉した徳正という身体は、第三部のテーマである記憶と接触したことで変化する身体の問題へと連なるものとして提示されている。

第三部では、「ふとしたきつかけで戦時記憶に〈接触〉し、それによつて身体を〈変化〉させた人物を描き出す作品」が論じられ、とくに「眼の奥の森」で描かれるような、「戦時における性暴力の記憶が現代に連続していく沖縄において、対抗暴力で解消し得ない記憶を抱える人物、あるいはさまざまな暴力に晒されてもなお〈そこまでして生きないといけない〉人物が見せる問題」が論じられる。第九章では、崎山多美「月や、あらん」を論じている。著者は、「月や、あらん」が企図したものが、戦時性暴力におけるノイズとされた声への対峙といった読解を契機に、さまざまなマイノリティが発する〈ノイズ〉への対峙と、論者を

含む読者の読みをも拡張させていくことにあると見ることができる⁽⁴⁾」と述べ、沖縄における「女性と社会の関係、沖縄内に埋もれる米軍兵士による女性への性暴力、児童虐待、格差社会といった沖縄社会の諸問題の中での「ノイズ」化する声が「ヨメて」くる⁽⁵⁾」可能性を示唆するものへと崎山のテクストが変化したことを示している。また第十章では、目取真俊「眼の奥の森」が論じられ、そこでは第二部で主に論じられた対抗暴力の行方として、人々が暴力に対し自身の暴力性が発露することを自覚することで「非暴力性」を獲得することが明示される。

ここにすべての章の内容を記述することはできていないが、そうであつたとしても本書が論じる問題の多様さを読み取ることは難しくないだろう。最後に本書と原爆の問題の関係について触れて、本稿を閉じることとする。

本書は「原爆」という主題を扱つたものではないが、著者は別稿において、〈沖縄文学〉と〈原爆文学〉のあいだに次のような接点を提示する。著者は、後藤みな子の「炭塵の降る町」と「平和通り名付けられた街」において、〈母親〉らがともに〈狂気〉を発したことには注目し、それが「挙行される皇族——戦争責任者であり、〈国家の象徴〉の訪問において、車列を追いかける／に飛び出す行為として発露した」ことに近代日本におけるジエノサイドと天皇制の影響を見ようとする⁽⁶⁾。〈声〉を聞くこと、あるいは〈声〉にも満たない「ノイズ」のような（嘆き）を聞くこと。それは原爆以後の世界ではそばそと続けられた嘗みである。原民喜が死者たちの嘆きに耳を傾けたように、そして大田洋子が〈原民綺〉の声を聞こうとしたように。また「平和通りと名付

けられた街を歩いて」というタイトルは、広島の「平和大通り」の記憶とも交差するだろう。大田洋子「夕凧の街と人と」一九五三年の実態における平和記念都市として復興していく広島市にたいする違和感と、その過程で聴かれることのなかつた多くの〈声〉が想起される⁽⁷⁾。

〈沖縄〉、〈長崎〉、〈広島〉、そして近代日本の歴史のなかでうち捨てられてきた無数の〈声〉を、著者が今後どのようにすくいあげていくのか、そしてその〈声〉をどのように表現していくのか期待される。

(二〇二三年三月二五日 春風社 四四三頁 四二〇〇円+税)

注

1 栗山雄佑、『(怒り)の文学化——近現代日本文学から〈沖縄〉を考える』春風社、二〇二三年、四三四頁。

2 前掲、七頁。

3 前掲、一三頁。

4 前掲、三七五頁。

5 同前。

6 栗山雄佑、「母の〈狂気〉を聞く」『原爆文学研究会会報』第六九号、二〇二三年、一頁。

7 岸佑、「廣島とヒロシマ」の間——平和記念公園の史的研究『ICU比較文化』四一号、二〇〇九年、二四三—二七四頁、福間良明、「慰靈祭」の言説空間と「広島——「無難さ」の政治学『現代思想』四四卷一五号、二〇一六年、二一六—二二七頁など。